

研修委員会の活動

— 過去，現在，未来 —

鈴木正司

key words：コンセンサス・カンファランス (consensus conference)，アクセス研究会，カレント・トピックス (current topics)，研修セミナー，公募研究助成

要 旨

透析医会の前身の時代から「研修活動」は存在したが、組織立って開始されたのは社団法人化された以降のことである。定款の中で「人工透析従事者の教育・研修」が医会の事業のひとつと明記され、研修委員会を組織し、実質的には社団法人化の翌年（秋季）から Consensus Conference (CC) として始まった。さらに 1 年遅れて春季には「アクセス研究会」が 7 年間行われ、1996 年以降には Current Topics (CT) と内容・構成も様変わりした。そして 2011 年以降には春季・秋季とも CT の名称に統一し、春季は総会と同日開催に、秋季は東京以外の地方開催と大きな変革を行って、現在に至っている。

はじめに

現在のような「研修セミナー」とはやや異なるものの、「研修活動」は透析医会が社団法人化される以前の萌芽期から、すでに行われていた。現在の日本透析医会の定款、第 2 章、第 4 条には、6 項目の「事業」が列記されており、そのひとつに「人工透析従事者の教育・研修」が明記されている。つまり、これまでの透析医会の研修活動は、その事業のひとつを具現化するものとして継続的に実施されてきたものである。

本稿では研修委員会のこれまでの「研修活動」を概観し、それをもって今後の新たな活動の糧としたい。

1 「社団法人」の認可以前の活動

医会事務局に遺された資料をみると、旧くは 1978 年（昭和 53 年）12 月に“日本透析医会 設立世話人会”が開催され、透析医師の会を設立する必要性が熱く論議された。そのさいに「透析医療の社会経済研究講演会」が東京都内の持田製薬 KK ルークホールで行われている。そこでは 3 氏による以下の講演が行われている。これは実質的には透析医師仲間での勉強会とも言うべき内容であった。

- ① 健康保険医療における透析医療（西 三郎）
- ② アメリカの透析医療費について（西村周二）
- ③ 医療費改定前後における透析医療費の分析（田中 滋）

しかし、その時点では 18 都道府県の透析医会の集まりでしかないことから（例えば東京都の透析医会は存在せず、千葉・東京・茨城にまたがる東関東透析医会の名称で参加）、暫くの間は“都道府県透析医連合会”の名称を用い、新潟の平澤由平先生が会長を務めることになった。そして翌年の 1979 年（昭和 54 年）4 月には、“都道府県透析医連合会”の主催で「第 1 回研究研修会」が、再び持田製薬 KK ルークホールで行われている。しかし、残念ながら当日の状況を記録した写真が数葉遺されているものの、当日の演題名や演者名の記録は散逸してしまっている。さらに、研究研修会が「第 2 回」あるいは「第 3 回」と継続されたのかも判然としない。いずれにしても、この時期に平澤会長が、全国各地での講演会に併せて県単位での透析

医会の設立を熱心に働きかけされていた。筆者もそのような機会に「鞆持ち」で2,3度同席した記憶がある。

さらに、1985年（昭和60年）7月に、東京大学の稲生綱政先生を会長として社団法人“日本腎不全対策協会”が設立され、これがその2年後の社団法人「日本透析医会」設立に繋がることになる。ここで漸く1987年（昭和62年）7月に、稲生先生を会長、平澤先生を副会長として社団法人としての「日本透析医会」が認可・発足することになる。

2 社団法人「日本透析医会」による研修活動が始まる

社団法人化された日本透析医会の中に「研修委員会」が組織されたが、その初代委員長は阿岸鉄三先生、副委員長は中川成之輔先生、委員には川原弘久、坂井瑠実、後藤宏一郎、今忠正の各先生が任命されている。

この研修委員会により、翌年の1988年（昭和63年）7月に「日本透析医会設立1周年記念シンポジウム」が開催された。その時のテーマは「明日の腎不全対策」とされた。翌年からは毎年9～10月に Consensus Conference

の名称で研修セミナーが行われるようになったことから、この1周年記念シンポジウムを Consensus Conference の第1回と捉えるべきであろう。

このようにして始まった研修委員会ではあるが、平成16年度まで委員長を務めた阿岸先生に代わり、平成17年度から同29年度までを大平整爾先生が務めた。しかし任期途中の平成29年9月の大平先生の急逝に伴い、筆者が急遽その任を引き継ぐことになった。

阿岸委員長時代には、秋の Consensus Conference に対応して、1989年（平成元年）～1995年（平成7年）の春季には、7年連続して「アクセス研究会」が実施された。1996年以降は女子医大の太田和夫先生を中心として、透析医会から独立した新たな学術団体「アクセス研究会」が発足することになりその使命を終了とした。

そして1996年（平成8年）の春季からは、Current Topics との名称での新たな研修セミナーの企画がスタートした。それ以降の春季・秋季研修セミナーの大

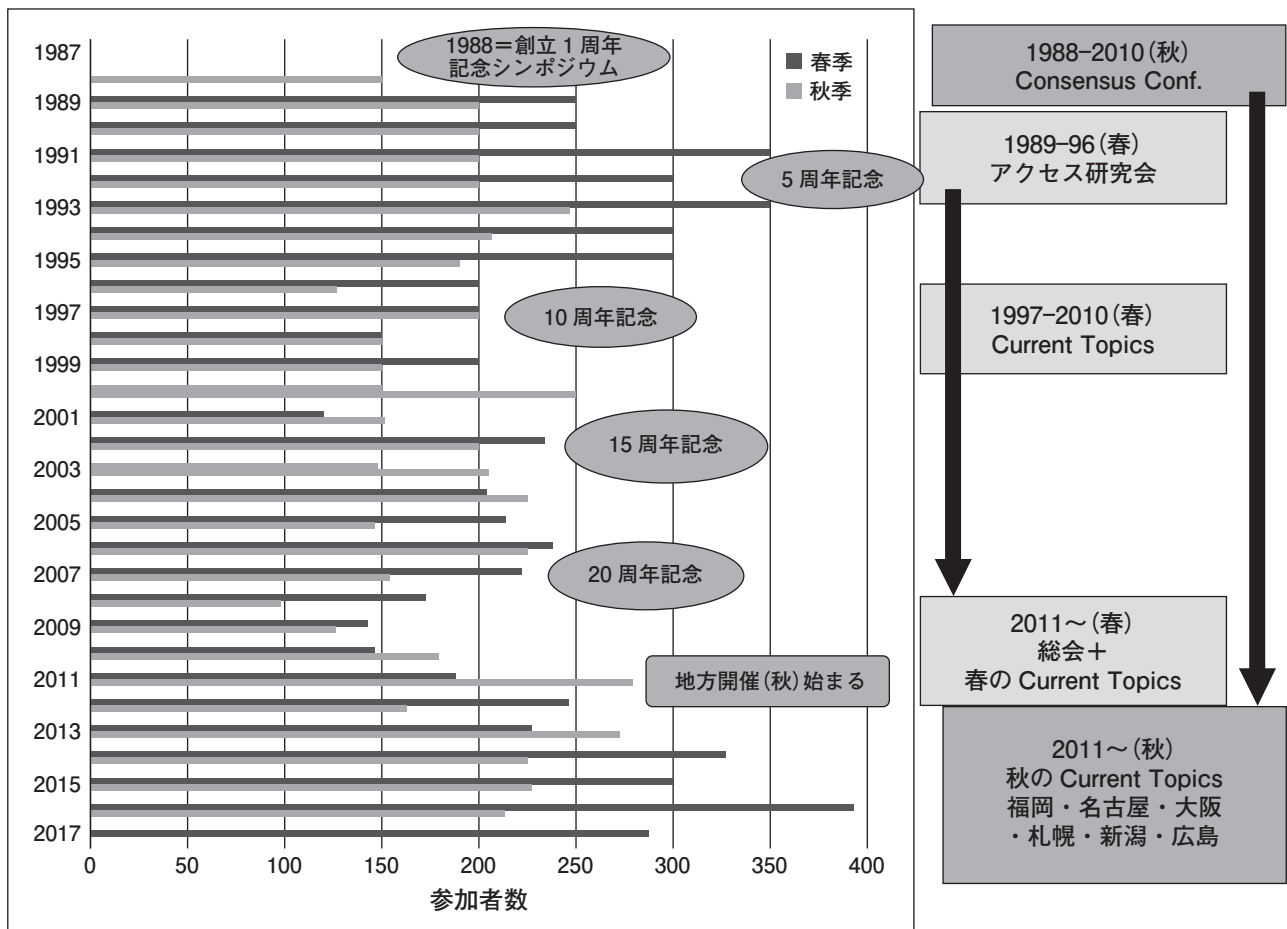


図1 春季・秋季研修セミナーの大きな流れと参加者数

きな流れをも含めて図1に示した。

3 秋季研修セミナー「Consensus Conference」の始まりとその変質

ちなみに Consensus Conference とは、本来の意味では consensus を得るための conference、つまり、ひとつのテーマを多角的な面から講演・討論し、その場で参加者の大方の consensus を得る討論形式を指すものである。社団法人化2周年の1989年（平成元年）の Consensus Conference（第2回）のテーマは「適切な透析導入のあり方」であった。これは同年の透析療法研究会（現在の日本透析医学会の前身）で、いわゆる「早すぎる透析導入」の報道事件があったことを受けて設定されたテーマであった。このようなテーマ設定は当に Consensus Conference に相応しいものであり、実際にもホットな講演や討論があり、「血清クレアチニン値が8.0 mg/dlを越えなければ透析適応とはならない」との固定的な考え方は正しくない、との consensus がここで生まれたことを記憶している。

しかし、その後の秋季の Consensus Conference では、必ずしもこのような形式での講演・討論に馴染まないテーマ——例えば、長期透析と合併症（第3回）、腎移植・透析スタッフとの接点（第4回）等が続いた（図2の右側）。そして1992年（平成4年）に「設立5周年」を迎えての記念シンポジウムとして「透析患者のQOLと透析量」を行った。当然ながら、これらのテーマでも、その場の参加者で consensus を創る形式では行いえなかったが、その後も秋の研修セミナーは Consensus Conference との名称を継承した。しか

し、実際には透析医療の全般に亘る諸問題の中からタイムリーなテーマをひとつ設定し、そのテーマを多視点から5~6人の演者に講演して頂き、質疑・応答する形式で行われてきた（図3~6の右側）。ただし、そのさいの演題・演者の設定に関しては研修委員会での十分な討議を経て、医師以外にも透析医療に従事する多職種のスタッフをも対象とすることに常に配慮してきた。

4 春季研修セミナー「アクセス研究会」の始まりと終了

先に述べたごとく、1989年（平成元年）3月から、春季の研修セミナーとして「アクセス研究会」の開催が始まった。これは当時の医療現場で、バスキュラーアクセス（VA）への関心が大きかったため、タイムリーな企画であった。実際にも、毎回の参加者数は200~300名と好評であった。ちなみに第1回の「アクセス研究会」では一般演題43、教育講演1題で始まり、その後の演題数の推移は表1に示すごとくであった。

表1 アクセス研究会（日本透析医会、1989~1995年）

開催年	一般演題	教育講演	シンポジウムワークショップ	総演題数
1989	43	1	0	44
1990	22	1	0	23
1991	37	0	1×6	43
1992	19	0	1×6	25
1993	24	1	1×10	35
1994	15	1	1×8	24
1995	14	1	1×6	21

日本透析医会の教育・研修(1988-1991)	
<春季セミナー>	<秋季セミナー>

• 1989年 アクセス研究会(1)	• 1988(S.63)年7月 1周年記念シンポジウム(1) * 明日の腎不全対策
• 1990年 アクセス研究会(2)	• 1989(H.01)年 Consens. Conf.(2) * 適正な透析導入のあり方
• 1991年 アクセス研究会(3)	• 1990(H.02)年 Consens. Conf.(3) * 長期透析と合併症
	• 1991(H.03)年 Consens. Conf.(4) * 腎移植・透析スタッフとの接点

図2

1992-1994年	
<春季セミナー>	<秋季セミナー>
• 1992(H.04)年 アクセス研究会(4)	• 1992(H.04)年 5周年記念シンポジウム(5) * 透析患者のQOLと透析量
• 1993(H.05)年 アクセス研究会(5)	• 1993(H.05)年 Consens. Conf.(6) * 血液(濾過型)浄化器の機能分類
• 1994(H.06)年 アクセス研究会(6)	• 1994(H.06)年 Consens. Conf.(7) * 抗血液凝固薬の使い分け・適正使用

図3

1995-1998年
1996年～アクセス研究会→「透析医療におけるCurrent Topics(春季)」に移行

<p><春季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 1995年 アクセス研究会(7) ----- • 1996年 春季セミナー * Current Topics--1996(1) • 1997年 * Current Topics--1997(2) • 1998年 * Current Topics--1998(3) 	<p><秋季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 1995(H.07)年 Consens. Conf. (8) * 2nd.HPTの保存治療の限界と手術適応 • 1996(H.08)年 Consens. Conf. (9) * EPO投与の適切な病態・用法・用量 • 1997(H.09)年 10周年記念シンポジウム * 21世紀への提言—長期生存とQOL • 1998(H.10)年 Consens. Conf. (11) * 維持HDFの考え方と使い方
---	--

図 4

1999-2002年

<p><春季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 1999年 * Current Topics—1999(5) 介護保険と透析医療 • 2000年 * Current Topics—2000(6) 維持透析患者の感染症 • 2001年 * Current Topics—2001(7) • 2002年 * Current Topics—2002(8) 透析の導入と中断 	<p><秋季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 1999(H.11)年 Consens. Conf. (12) * AVトラアルに対するInterv.治療の適応/限界 • 2000年2000(H.12)年 Consens. Conf. (13) * 透析液の清浄度基準 • 2001年(H.13)年 Consens. Conf. (14) * 医療保険適用を視野に入れた血液浄化療法の系統化 • 2002年(H.14)年 15周年記念シンポジウム(15) * 5年後の腎不全医療を考える
--	--

図 5

2003-2006年

<p><春季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 2003年 * Current Topics—2003(9) • 2004年 * Current Topics—2004(10) • 2005年 * Current Topics—2005(11) 透析の量と質 • 2006年 * Current Topics—2006(12) 日常臨床の向上を目指して 	<p><秋季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 2003(H.15)年 Consens. Conf. (16) * 維持透析患者の血圧管理 • 2004(H.16)年 Consens. Conf. (17) * 透析患者の下肢閉塞性動脈硬化症の診断と治療 • 2005(H.17)年 Consens. Conf. (18) * 維持透析患者の消化器疾患 • 2006(H.18)年 Consens. Conf. (19) * JSDT 2HPT治療がイライラを巡って
---	--

図 6

2007-2010年

<p><春季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 2007年 * Current Topics--2007(13) • 2008年 * Current Topics--2008(14) • 2009年 * Current Topics--2009(15) • 2010年 * Current Topics--2010(16) 	<p><秋季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 2007(H.19)年 20周年記念シンポジウム(20) * 維持透析療法の現況と将来の展望 • 2008(H.20)年 Consens. Conf. (21) * 透析医のためのCKD管理—透析導入後の予後向上を目指して • 2009(H.21)年 Consens. Conf. (22) * 維持透析療法の明日を拓く • 2010(H.22)年 Consens. Conf. (23) * 透析液を再考する
--	--

図 7

2011-2014年
秋季のConsen. Conference→「Current Topics(秋季)」に移行
春季=総会と同時開催、秋季=地方開催

<p><春季>総会+統一のテーマ</p> <ul style="list-style-type: none"> • 2011(H.23)年 * Current Topics--011(17) 日常透析が抱える諸問題 • 2012(H.24)年 * Current Topics--2012(18) 高齢者の維持透析療法 • 2013(H.25)年 * Current Topics--2013(19) 合併症対策と進歩 • 2014(H.26)年 * Current Topics--2014(20) 透析医療での社会的問題 	<p><秋季>地方開催・多彩なテーマで</p> <ul style="list-style-type: none"> • 2011(H.23)年 Current Topics 2011 (24) (日常透析に横たわる困難性への挑戦)福岡 • 2012(H.24)年 Current Topics 2011 (25) (維持透析の“今”を問う)名古屋 • 2013(H.25)年 Current Topics 2011 (26) (透析患者の合併症に備える)大阪 • 2014(H.26)年 Current Topics 2011 (27) (英知を結集し透析療法に新たな潮流を)札幌
--	---

図 8

2015～2017年

<p><春季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 2015(H.27)年 * Current Topics--2015(21) 透析専門医と関連GL • 2016(H.28)年 * Current Topics--2016(22) 透析患者の感染症への挑戦 • 2017(H.29)年 * Current Topics--2017(23) 高齢者透析療法を再考する 	<p><秋季></p> <ul style="list-style-type: none"> • 2015(H.27)年 Current Topics (28) (透析療法～その過去・今日・未来～)新潟 • 2016(H.28)年 Current Topics (29) (日常臨床のヒットアール)広島 • 2017(H.29)年 創立30周年記念(30)東京を会場として 日本透析医会30年の歩みと 現状、今後の展望
---	--

図 9

この「アクセス研究会」は1995年(平成7年)まで7年連続して開催されたが、翌1996年以降は女子医大の太田和夫先生を中心として、透析医会から独立した新たな学術団体「アクセス研究会」が誕生するこ

とに繋がったことから、その時点で透析医会の使命を終了した(図2～4の左側)。

5 春季研修セミナー「Current Topics」の始まり

前述のごとく「アクセス研究会」が1995年で終了したことから、翌年からの春季研修セミナーとして、新たに「Current Topics」を企画・開始した(図4~6, 図7の左側)。これは文字通りに、腎臓病・末期腎不全・透析を含む腎代替え医療・多彩な合併症の分野で新たに登場した問題や、古くからの諸問題を新たな視点で考え直す……などの話題を取り上げて、解説・講演・質疑・応答を行うとする意図であった。これは以下で述べる2011年(平成23年)の医会の改革を経て、現在まで継続されている。

6 2011年(平成23年)の透析医会の改革に併せた研修セミナーの大きな変革

これまでに秋季の「Consensus Conference」、および春季の「アクセス研究会」から「Current Topics」の流れについて概説したが、2011年(平成23年)以降に大きな変革が行われた。つまり、2010年(平成22年)までは春季研修セミナーは3月に、社団法人として法的に必須である「総会」を5月に、それぞれ別個に開催する年間スケジュールとなっていた。しかし時間と費用の面から、春季研修セミナーと「総会」を同日・同一会場で開催することが常任理事会・理事会で検討された。その結果、2011年(平成23年)の5月から春季研修セミナーの昼食時間帯の1時間を「総会」の開催に当てる方式となった。

さらに、これまでの春季、秋季研修セミナーはすべて東京で開催されてきたが、秋季研修セミナーを東京以外の地方での開催にするとの考え方が了承された。

これに併せて、春季、秋季共に研修セミナーを「Current Topics」の名称に統一することになった。そして春季には単一のテーマを多視点から取り上げる形式(これは従来まで秋季研修セミナーで行ってきた形式)とし、秋季にはタイムリーで多彩なテーマを取り上げる形式として、各5,6題の講演・質疑・応答を行う形式とする明確なセミナー構成に変更された(図8, 9, 図1)。

7 2011年(平成23年)以降の研修セミナーの実際

春季研修セミナーと総会を同日・同一会場で開催する変革の影響を、参加者数の推移で見ると、2006~

2010年(平成18~22年)の春季研修セミナー参加者数の平均は184.6名であった。総会と春季研修セミナーを同日・同一会場での開催とした2011~2017年(平成23~29年)の平均参加者数は280.7名であった。このさい、同時開催が会員以外の一般参加者の数に大きく影響したとは考えにくいことから、総会参加も兼ねた医会会員の参加者数が増えたものと理解される結果であった(図1)。

さらに、2011年以降の秋季研修セミナーが地方開催となり、2011~2016年(平成23~28年)までに福岡、名古屋、大阪、札幌、新潟、広島の間で開催されたが、平均参加者数は229.8名であり、地方開催では周辺地域から多職種のスタッフの参加が見られたのが特徴的であった。これは社団法人たる日本透析医会の事業のひとつである「人工透析従事者の教育・研修」の目的からすれば喜ばしい結果であったと評価できる。なお、2017年(平成29年)の秋季研修セミナーは、「設立30周年記念講演会」として、例外的に東京で開催されたが、2018年(平成30年)の秋季研修セミナーは仙台で開催されることが決まっている。

8 公募研究助成への活動

透析医会では、公益事業として腎不全・透析医療に関わる研究への公募研究助成活動を2004年(平成16年)から実施している。2009年(平成21年)までは、この応募研究の助成に関する評価・審査業務を研修委員会が行ってきた。例えば初年度には4件の研究に対して各50~100万円の助成を決定している。

最近の年間助成総額はおよそ2,000万円にもなる。その審査業務は2010年(平成22年)以降からは、医会会長下に外部委員を加えた審査委員会が設置されて、より詳細・厳正な評価を基に審査が行われている。

9 今後の研修委員会の活動

研修委員会の主要な任務は日本透析医会の事業のひとつである「人工透析従事者の教育・研修」である。そして、これまでの活動はそれなりに評価される内容であった。しかしながら、我々が取り組んできた研修セミナーの内容が、現在の人工透析療法の抱える広域で多彩な問題を十分にカバーしているのか、については再考すべき点がないとは言いきれない。

我が国の透析医療の現場では、国民全体の高齢化よ

りもさらに急速に高齢化が進行している。このような医療現場において、知識と実技の充実・研鑽は当然ながら必要である。一方では患者や家族が真に必要としている事に対する、幅広い見識を有する医療人でもあることが求められている。したがって、これからの透

析医療現場では、社会資本の活用・サイコネフロジー的な側面・生死との向き合い方などの知識の研鑽も、その比重が大きくなってきていると思われる。研修委員会にもそのような視点を保持した姿勢が求められよう。